

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年作文の部 最優秀賞

私の将来の夢

明光小学校六年

北岸きたぎし

華歩かほ

私が生まれたときに、家には3びきの犬がいました。移動動物園で使われていた犬、ブリーダーさんが飼えなくなった犬、ぎゃくたいされて保護された犬。3びきとも、私のお母さんが動物病院で看護師として働いている縁で家に来ました。まだよちよち歩きしかできない私のペースに合わせて散歩してくれたり、変なところへ飛ばしてしまつたボールを一生けん命に追いかけてくわえてきてくれたり、どの子にもたくさんの思い出があります。

2年前、最後の1びきが亡くなりました。毎日病院に連れていって点滴をし、家に帰ってから点滴、そして、体のできものの汁をふいて消毒をするというのが日課でした。私も、お手伝いをしていく中で、一日でも長く生きてもらうにはどうすればいいのだろう、と考えるようになりました。毎日毎日一生けん命生きている犬を見て、私も助けてあげられるじゅう医師になりたいと思いました。

お母さんに、
「じゅう医師になりたい。」
と言つたところ、

「お母さんもなりたかつたものだからがんばれつて応援するけれど、かわいだけの仕事じゃないんだよ。」

と言われました。確かに、血のついたガーゼを替える時には痛くて鳴いていたし、かみつこうとしてきた時もありました。でも、昨日食べられなかつたご飯を食べてくれた時は、とてもうれしかったです。亡くなつた時はすごく悲しくて泣いたけど、たくさんめんどうをみてあげられてよかつたと思ひ、たくさん動物を助けてあげたいと思ひました。

じゅう医師になるためには、6年間じゅう医系の大学に通ひ、じゅう医国家試験に合格しなければなりません。じゅう医系の大学に行くにはたくさん勉強しないとイケないそうです。また、じゅう医師になつても、病気のことなどについて毎日勉強するそうです。そして、話せない動物の気持ちをわかつてあげることが、最も大切です。でも、病気が治つた

時は、きつと、そんな苦勞もふき飛ぶくらいうれしいんだと思ひます。

今、私の家には犬が2ひきいます、1びきは、ペットショップから飼ひ主さんの所へ行つたけれど、ひじに悪いできものがあつたためにペットショップに返されてしまつた犬です。もう1びきは、生まれた時から両目が見えない犬です。ひじの悪いできものは、手術をして取り除いたので、今はとても元気に過ごしています。目の見えない犬は、本当は見えているんじゃないかと思うくらい、元気に動き回つています。2ひきともまだ若いけれど、いつ何が起るかわかりません。もし、何かあつたら、私がじゅう医師になり、助けてあげたいです。今、じゅう医師ではない私が、この2ひきにできることは、精いっぱいかわいがることです。かわいがるということは、ただかわいがるだけではなく、時にきびしくしかることも大切です。2ひきとも、生まれて間もない時から育てているので、しかる時は胸が痛くなります。それは、子育てをしているのと同じなかなと思ひます。

じゅう医師になるには、ぐつとたえる気持ちが必要だそうです。私は、水球を習つています。つらい時、やめたいなと思つた時は、ぐつとたえてきました。だから、練習がきつくてまたやめたいなと思つても、ぐつとたえて、強い心をもつてじゅう医師に一步でも近づけるといいなと思ひます。

お母さんはよく、
「昔は動物を飼うことは『ペットを飼う』という人が多かつたけど今は、『家族になる』というふうにかえる人が増えたよ。」
と言ひます。そうなつた理由の一つは、かく家族が増えたことがあるそうです。家で一人で待つ子どもがさみしくないように、飼うことがあるそうです。

この前、お母さんの働く動物病院へ遊びに行きました。動物たちが入院している部屋には、点滴をされている犬や猫がたくさんいました。じん臓が悪い子、かん臓が悪い子、骨折をしている子など、病気もさまざま

まです。

お母さんが、

「早くおうちに帰れるといいね。」

と、言っていました。動物もやっばり、病院より自分の家族のいる家の方が幸せだろうなと思いました。

私がじゅう医師になったら、病気の犬や猫が一日でも早く家に帰れるようにしてあげたいです。今は、精いっぱい家の犬をかわいがりたいです。

